

# 仏文学と国文学の橋渡しとしてのラフカディオ・ハーンの役割 ——ゴーティエ・ハーン・芥川の流れを例として——

松 村 恒

## 0. はじめに

真の文学的創作活動の視点から見れば、翻訳は二次的な価値しか有さないように見えることは否めない。しかし翻訳がひとつの文化圏の文学的背景を豊かにさせていったことも事実である。文学作品の翻訳の持つ意義について論ずるのは余りに大きな主題であり、小論のよくするところではないが、視点を外国文学の日本語訳から日本文学の外国語訳（ここでは英語）にちょっと替えて見るとあるヒントが引き出されはしまいか。ハーン、チェンバレンが日本紹介の第一の波であるとする、米国の場合短い間に近代化を果たした日本の解明の一環として国家により養成された情報将校が日本の情報を様々に伝達したが、そこには日本文学の翻訳も含まれる。こうした時期を第二の波であるとする、ドナルド・キーン、エドワード・サイデンステッカー、ロバート・ブラワー、アール・マイナー等はこれに属するものである。数年前までは外国人が日本語で日本文学を鑑賞するといった状況は殆ど想像を絶するものであったが、日本文学が世界文学の中に位置を占めるとしたら、それがたとえどんな位置であるとしても、この世代の努力に負うものである。この世代の研究者には、戦後の新しい文学批評の方法も習得している人があり、そうした人の手になる翻訳は、単なる異言語への移し替え以上の意義をも持っていた筈である。

ここで視点を日本中心に据えれば、明治維新以来の文明開化の流れの中で、西洋文学の翻訳はそれ自体価値のある営みであった。

また一方で文学者自身が翻訳を受動的にでなく、能動的に活用した例もある。ラフカディオ・ハーンがその一例である。著述活動を始めた最初期の段階で、フランス文学の英訳に相当の力を注いでいた。単純には自らの文章修行の意味がその動機に置かれるであろうが、被翻訳作品の文化と翻訳言語の文化の差異から生ずる問題にも気付いていたことは、既存の英訳書への批評文からも伺える。

わが国の場合、翻訳の対象となる言語は英語が圧倒的に主流を占めていた様であるが、ハーンの英訳を介在して和訳が作られたとしたら、ハーンの訳業は間接的にはあるが、外国文学の日本への導入にも貢献したことになる。

こうした様々な事情を見据えながら、これまで考察されることの多くなかったハーンの英訳を再考してゆくことは意義のあることであり、またハーンの著作の総体的理解の上にも欠かすことはできない。

## 1. ハーンの翻訳活動

複雑な国家的・民族的・文化的背景を持つハーンは英語を母国語もしくは第一言語としていた。第二言語はもちろんフランス語である。フランス語の習得は、その大部分が不明とされているフランスの学校在学時代になされたものか、あるいはシンシナティ、ニューオーリンズ時代に公立図書館で次々と仏文学の書を読破していく過程で培われたものかは、には決定できないが<sup>(1)</sup>、フランス語から英語への翻訳に多大な関心を抱いていたことは、自らの翻訳活動<sup>(2)</sup> 並びに既存のフランス文学の英訳書の書評をいくつか執筆している事実に徴すれば明かである。

英語文学も含めてハーンの言及する作家文人には様々なジャンルに配置される人が含まれるので、その文学的嗜好は幅広いものがあつたが、最初期の翻訳のひとつにテオフィル・ゴーティエが選ばれたのは、やはり若い頃から怪奇趣味を持っていたことの証しとなろう。

### 1.1. ハーンのゴーティエ作品の翻訳

ハーンはゴーティエを好んでいた。ハーンの（恐らくは）最初の翻訳は1878年に『ニューオーリンズアイテム』紙に発表したゴーティエの「ミイラの足」であつた<sup>(3)</sup>。それを皮切りに続々と翻訳活動が新聞記事の執筆と平行して進められるのであるが、ゴーティエ作品は計7篇扱われた（松村 2002: 11-12）。ハーンはロマン主義のあとに支配的な風潮となった実証主義やフィリニスティニズム、ピューリタニズムには背を向けて芸術至上主義的傾向を有していたが、これにはロベールの指摘する様に<sup>(4)</sup> ゴーティエの影響があずかっていた。ハーンにおけるゴーティエの存在はこれまで問題にされることが多くなかったが、ハーンが書簡にてしばしばゴーティエに言及している事実からしても<sup>(5)</sup>、もっと意識されてもよい様に思う。今回は「クラリモンド」のみを例として取り上げるが、これには後述の理由がある。ハーン訳はハーンの翻訳（集）の中に数度収載されている。

*One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romans.* by Théophile Gautier. Faithfully Translated by Lafcadio Hearn. (New York: R. Worthington, 1882); *Clarimonde* (New York: Brentano's, 1899); *Stories by Gautier*, ed. by Arthur Ransome (= The World's Story Tellers)(London: T.C. & E.C. Jack, [1880]); *Tales from Gautier*, with a preface by George Saintsbury (London: Eveleigh Nash and Grayson, 1927).

今日「クラリモンド」のフランス文は、取り敢えず以下のゴーティエ作品集により容易に見られる。

"La morte amoureuse," *Théophile Gautier L'œuvre fantastique*, I. Nouvelles, éd. par Michel Crouzet (= Classiques Garnier)(Paris: Bordas, 1992), 75-102 cum 69-74 (notice), 257-268 (notes); *Théophile Gautier, Romans, contes et nouvelles* I, éd. par Claudine Lacoste-Veysseyre (= Bibliothèque de la Pléiade)([Paris]: Gallimard, 2002), 525-552 cum 1344-1352 (notice et notes).

現行のゴージェ作品は上に示される通り「恋する死者」であるが、ハーンの英訳は「クラリモンド」となっている。本作に登場する女性の名がクラリモンドであるから、翻訳の標題にその名を採用することもあり得ることであるが、フランス語原作の初版改版の事情も見ておく必要がある。ミシェル・クルーゼの解題によれば初版は、“Les amours d'une morte” という題で *Chronique de Paris, journal politique et littéraire* (23 et 26 juin 1836) に掲載された。この初版は1839年に “Une larme du diable” と共に単行本に収録され、1845年には『小説集』の一部となり、これが決定版とされる。*Revue pittoresque* (20 janvier 1850) には「クラリモンド」の題のもとに再刊されている。現行の標題になったのは1845年らしいが、「クラリモンド」という題からして、ハーンは最後者を原典にしたのではないかと想像される。但し小論ではそれを入手できなかったので、引用のフランス文は暫定的にすべてガルニエ版に基づくこととする。ハーンの英訳は1899年版に依る。

## 2. ハーンの翻訳態度

ハーンがゾラなどのフランス文学の粗雑な英語訳に怒りをこめて書評を書いた経緯はYu 1964: 4-5; 松村2002: 13-14にあるので再説を必要とはしないので、「計25ドルのために」という新聞記事を引いておこう。

... it is equally necessary to obtain a just equivalent for each word, in regard to force, colour, and form; —and to preserve, so far as possible, the original construction of the phrase, the peculiarity of the rhetoric, the music of the style. ...

("For the Sum of \$25," *Times-Democrat* (Sep. 24, 1882), quoted in Tinker 1925: 158-160)  
この翻訳理念がハーン自身の翻訳作業にいかに関与しているかということであるが<sup>(6)</sup>、「クラリモンド」の一節をめぐってハーンとジェローム・A・ハートの間にちょっとした論争があった。ハートからの書簡を見るのは困難であるが、これはYu 1964: 8-9にも言及されているので、それを参照しつつ原文にも遡って瞥見してみよう。

Ici gît Clarimonde

Qui fut de son vivant

La plus belle du monde.

(101.5-7)

Here lies Clarimonde

Who was famed in her life-time

As the fairest of women.

(71.18-20)

この英訳に対しハーンは脚註を付けている。フランス語原文を引いた後で「破格の3行に表現されている美が翻訳では失われているが、これは避けがたいことであった」と述べている。ハーンが自分の翻訳に不満が残ったことを受けて、ハートは次の様な己の試訳を与える。

Here lieth Clarimonde,

Who was, what time she lived,

The loveliest in the land.

更にこれにコメントを付して言う。“The fleeting archaic flavour of the original is not entirely lost here, and the lines are broken, yet metrical.” これに対してハーンの応えるところは<sup>(7)</sup>、ハートの1,2行目が優れていることは認めるものの、3行目はハートの訳では意味が狭すぎるので認められないという。3行目の原文は単に一国の中で美しいというのではなく、全世界で美しいと言っていると主張する。mondeに単なる国という意味でなく、世界全体という意味を読みこんでいるからである。そして最後に自分の翻訳嗜好はliteralismであると結ぶ。このliterarismが単に「逐次訳」というだけでなく、「文学的」という意味も込められていることは、松村2002: 15でも指摘した通りである。

### 3. 英訳の実例

ハーンの英訳文を瞥見すると、われわれは完了形が多用されていることに気付く。まずはそのあたりの事情を観察してみよう。

I confess to my shame that I had  
entirely forgotten the advice of the Abbé  
Sérapion and the sacred office wherewith I  
had been invested. I had fallen without  
resistance, and at the first assault. I had  
not even made the least effort to repel the  
tempter. (51.5-10)

Je l'avoue à ma honte, j'avais  
totalement oublié les avis de l'abbé  
Sérapion et le caractère dont j'étais  
revêtu. J'étais ombé sans résistance et au  
premier assault. Je n'avais pas même essayé  
de repousser le tentateur; (93.28-31)

先ずはAbbé Sérapionというアクサンの使用により、フランス語に緊密であろうという姿勢が伺えるが、英仏の文章を比べて、フランス文がまるで学習書の対訳本であるかの様にほぼ過不足なく英語に移し替えられていることに感歎する。英文の主文の主動詞は現在形であるから、従属する文の動詞は必ずしも過去完了形でなくともよいのであるが、ここの四つの過去完了形は例外なくフランス文の大過去に対応している。フランス語の複合過去の用法は英語の完了形よりもずっと広いが、ハーンは仏文の複合過去に対して英文で完了形を与える傾向は、数量的に統計をとったわけではないが、非常に強い。この傾向は大過去のみならず、条件法の場合にも細心の注意で移し替えられているのであるから、単なる偶然ではない。

Ah, must I confess it? That exquisite  
perfection of bodily form, although purified  
and made sacred by the shadow of death,  
affected me more voluptuously than it

Vous l'avouerais-je? cette perfection de  
formes, quoique purifiée et sanctifiée par  
l'ombre de la mort, me troublait plus  
voluptueusement qu'il n'aurait fallu, et ce

should have done, and that repose so closely resembled slumber that one might well have mistaken it for such. I forgot that I had come there to perform a funeral ceremony; (38.19-39.2)

repos ressemblait tant à un sommeil que l'on s'y serait trompé. J'oubliais que j'étais venu là pour un office funèbre, (88.43-89.4)

複合過去が常に完了形に置き換えられているというわけではない。多くはないが、そうでない例もある。

I always retained with extreme vividness all the perceptions of my two lives. (60.4-5)

J'ai toujours conservé très nettes les perceptions de mes deux existences. (96.41-42)

逆にこれも稀ではあるがフランス語では半過去であるのに、英語でわざわざ過去完了にした例もある。

For some time the health of Clarimonde had not been so good as usual; (63.7-8)

Depuis quelque temps la santé de Clarimonde n'était pas aussi bonne; (98.3-4)

この理由はよくはわからないが、ハーンの完了形を好む傾向を示す一例であろう。

ハーンは基本的には文法的形式をも忠実に写し出そうとした傾向が伺える。英語ほどには用法の幅が狭くないフランス語の複合時制を大部分英語の完了形に置き換えている。これにはハーン自身の文章でも完了形の出現する頻度が高いかどうかということを調査し、それとの相関関係をも調べるのが今後の課題となる。

#### 4. クラリモンドの和訳

クラリモンドの訳者には問題があった。初め和訳は久米正雄訳として『クレオパトラの一夜』（＝新潮文庫第10編）（東京：新潮社、1914）の中の一編として収録されて現れた。訳書には久米自身の「序」があり、

テオフィル・ゴーチエ（一八一——一八七二）の幻想的物語の絵画的幽艶は兼ねて聞き知ってゐた所であつたが、初めて之を繙き、更に之を邦語に移さむとするに至つて愈々其靈妙なる筆致に嘆賞の声をあげざるを得なかつた。顧みて、美しき語彙に貧しく、辞句の調理法に疎き我れの如き、決して其任にあらざるを思ふのである。・・・原語の読めぬ私はやむなくラフカディオ・ヘルンの英訳を用ゐたと、・・・而して友人、山宮允、

柳川隆之介、成瀬正一、三君の大なる助力なくば、今日の小成をすらす事ができなかつたのだ。

とあり、全般的に助力者の名を挙げるばかりで、まるで久米の訳業の様に出版されたのであった。文庫本は「序」も含めて1921年に新潮社からやはり久米正雄訳として同じ標題のもとに単行本として再刊されたが、依然芥川訳とされることはなかった。これが芥川訳とされるのは最初の芥川全集が編纂された時のことである。その月報8号（1929.2）に編輯者が記している。

「クラリモンド」は久米正雄氏の訳著である「クレオパトラの一夜」のなかに収められてゐるのであるが、これは全部芥川氏によつて訳されたものである。久米氏に依頼してその事を是非月報に書いていただかうと思つたが、久米氏が洋行されたためにそれは不可能のなつた。しかしこれを全集に入れるに就いては、無論、久米氏の諒解を得てゐるのである。

今日では「クラリモンド」が芥川の訳であることが確定している<sup>(8)</sup>。小論での引用は『芥川龍之介全集』1（東京：岩波、1995）所収のものに依る。

「クラリモンド」の訳出<sup>(9)</sup>と同じ頃、西条八十・日夏耿之介らが愛蘭土文学会を始めたが（1914年3月）、芥川は東大英文学科の一年先輩である山宮允と共にこれに参加した。こうした活動の一環として柳川隆之介の名で「「ケルトの薄明」より（イエーツ）」『新思潮』第1巻第4号（1914.5）を發表している。後にイエイツ研究家となる山宮の影響があったと思われるが、山宮はハーンの研究家・翻訳家<sup>(10)</sup>でもあった。

## 5. 芥川の和訳本

本節では芥川の訳文がゴーティエの原文から乖離している場合、それはハーンの英訳に由来するものであるかを検討する。

je n'en dormais pas, je rêvais que je disais la messe; (76.23-24)	わしは眠りさえすれば、必 ず祈祷を唱えてゐる夢をみ た。 (80.9-10)	I slept only to dream that I was saying mass; (4.9-10)
---	---	---

フランス語原文は眠らないのであるが、和訳では眠っている。これはハーンの英訳がろくろく深い眠りにつかずに夢を見るといったニュアンスで訳していることに由来する。これは英訳が介在したために、和訳文が原文からいっそう離れていった例である。

Oh! que Job a raison, et que celui-là est imprudent qui ne conclut pas un pacte	あゝ、ヨブが「軽忽なる 者は、眼を以て聖約を為さ ざる者なり」と云つたのは、	Ah, truly spake Job when he declared that the imprudent man is one who
---	--	--

avec ses yeux! (76.43-44) 真理である。 (81.8) hath not made a covenant  
with his eyes! (5.16-18)

フランス語原文は「契約を結ばないところの者は思慮がない」とあるので、和訳文は主語と補語が逆転していることになる。しかしハーンの英訳はフランス語の長い関係詞節が後置されているのに合わせて後置したために、和訳文では補語のようになってしまったのである。ついでながらこのヨブの言葉は31章1節で「わたしは自分の目と契約を結んでいるのに どうしておとめに目を注いだりしようか」(新共同訳)と肯定文の表現になっている。

以上の場合の様に英訳のためではなく、芥川自身に由来する乖離も指摘できる。

fin connaisseur en femmes,	女と犬と馬とにかけては、	a fine connoisseur in women,
en chiens et en chevaux,	眼のない人間になつてしま	dogs, and horses; gambling,
jouant aux dés, buvant et	ふ。博奕も打つ、酒も飲む、	drinking, and blaspheming;
blasphémant; (75.19-21)	罵詈をして神を馬鹿にもす	(2.9-11)
	る。 (79.2-3)	

和訳の神を馬鹿にもする、というのは仏英いずれにもないので、芥川の加筆であると判定できる。

こうした対照作業ではどうしても原文から逸れている部分の指摘に傾き勝ちであるが、基本的にはこの三者の筆力、訳者二名の翻訳力には賞賛に値いするものがある。クラリモンドの艶やかさの描写には、サンスクリット・カーヴィヤの一節を想起させる程華麗であるが、この微妙な表現が、翻訳、重訳を通じてよく伝えられている例をも挙げておこう。

De temps en temps elle	時々、彼女は物に驚いた蛇	From time to time she
redressait sa tête avec un	か孔雀のやうな、 <u>をのゝく</u>	elevated her head with the
<u>mouvement onduleux de</u>	<u>やうな嬌態を作つて</u> 、首を	undulating <u>grace</u> of a
couleuvre ou de paon qui	もたげる。すると銀の格子	<u>startled</u> serpent or peacock,
<u>se rengorge</u> , et imprimait	細工のやうに頸を捲いてゐ	thereby imparting a quivering
un léger frisson à la haute	る高いレースの襷襟がを	motion to the high lace ruff
fraise brodée a jour qui	のゝくやうに動くのである。	which surrounded it like a
l'entourait comme un	(83.9-11)	silver trellis-work. (8.20-24)
treillis d'argent. (78.7-11)		

フランス文の波線を施した部分は「身を反り返らせた動き」という意味であるが、ハーンは「驚きを示す優美さ」と微妙に置き換えた。しかし芥川は「をのゝくやうな嬌態を作つて」

と巧みにまとめて結果的にフランス語原文からも英文からも大きくは逸れないようにしている。これは単に文字面の理解ではなく、描写の状況の把握が適切になされているからである。

こうしたハーン・芥川の訳筆の冴えを見てくると、井上1992でつけられたラベル「換骨奪胎」は不適切であるといえよう。いずれの訳も単なる〈正確な訳〉というだけに留まらず、華麗な中にも忠実さを保った訳であると言わねばならない。

## 6. クラリモンドの再話(?)

芥川が短篇に勝れ、また古典その他に素材を求めた再話もの、更にはパロディーともいえるものに多々手を染めたことは、ハーンに比すことができよう。完成して発表されて後に全集にも収録されて伝えられている数々の作品の他にも、多くのプランがあった。その未定稿のうちのひとつに「天狗」という作品がある<sup>(11)</sup>。これを再話作品と呼ぶのには問題があるかもしれないが、『資料集』『全集』の解説は共に材源として『今昔物語集』巻二十 仏眼寺 仁照阿闍梨房託天狗女来語第六 を挙げているが、一方倉智 1971:11-12 は『今昔』を挙げることなく、「もとより翻案とも云えない」と留保を付けた上で、「天狗」と「クラリモンド」の類似点を5箇所挙げている。固有名詞の使用状況からしても『今昔』を第一の材源から外すわけにはいかないが、芥川がこれを執筆しているときに若き日の訳業が念頭にあったことは十分に予想される。以下には倉智が挙げる5例に更に追加を試みる。左から順に「天狗」芥川の「クラリモンド」を並べ、参考のために右欄にフランス語原文からの逐字訳を添えた(頁・行数はガルニエ版のもの)。

所が愈 出家して見ると  
仕合せと少しづつ僧侶の生  
活と云ふものに興味を持つ  
やうになつて来ました。

(356.9-10)

僧侶になるより愉快的な事は  
ない。かうわしは信じてゐ  
た。

(80.10-11)

神父であること、私は世界  
で[それ]よりもよいこと  
は何も見えなかった。

(76.24-25)

それは阿闍梨の前で、私が  
性欲に苦しまされてゐると  
云ふ事を懺悔してゐる中に、  
自然と性欲を肯定する気も  
ちが私の心の底へ忍びこん  
で来た事です。私はそれと  
同時に或慰安を感じました。

(360.14-16)

セラピオンの語は、わし  
を平常のわしに帰してくれ  
た。そして少しはわしの気  
も鎮つて来た。

(92.8)

セラピオン院長の説教は  
私に自分自身を取り戻させ  
た。そして少し前より落ち  
着いた。

(83.5-6)



若い僧侶が女性からおこる迷いと闘いながらも、また一方でそれを受け入れる心が芽生えてくる過程は、芥川にとって格好のモチーフとして、ゴーティエから受け継いだものであった。

## 7. まとめ

今日ゴーティエ自身は文学史の中でそれほど大きな位置を与えられているわけではないが、こうしたハーン、芥川への影響を考えあわせると、まだまだ切り捨てられない存在である。ハーンはゴーティエに触れることで自己に宿している怪奇趣味を満足させたばかりか、絢爛たる文章による芸術至上主義という文学嗜好を明確に打ち出していった。そしてハーンの訳業は自身の文学形成の素地のひとつとなったということのみならず、芥川にも更なる影響を与えた。若き芥川がいつときゴーティエに傾倒していたのは<sup>(12)</sup> 正しくハーンと平行的である。しかもフランス語を直接読まない芥川がゴーティエに接するにあたりそこに介在したのはハーンである。これは単なる偶然というより、三者の文学嗜好の波長が合致したからであって、ここに三者をつなぐ一本の糸を想定するのは穿ちすぎということではなさそうである。芥川は更にゴーティエから想を得て未完とはいえ「天狗」の製作を試みていた。こうした事情を勘案すれば、ハーンの訳業は単なる翻訳ということに留まらず、仏文学から日本文学への橋渡しの意義をも同時に有していたとすることができる。

### 依用文献

- Bisland, Elizabeth. 1906. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn* I. Boston: Houghton Mifflin.
- Gould, George M. 1908. *Concerning Lafcadio Hearn*. Philadelphia: George W. Jacobs & Company.
- 井上健 1992 「換骨奪胎の才 テオフィル・ゴーチエ「クラリモンド（死霊の恋）」芥川龍之介訳」『作家の訳した世界の文学』（＝丸善ライブラリー046）（東京：丸善），35-45.
- 倉智恒夫 1971 「芥川龍之介とテオフィル・ゴーチエ」『比較文学研究』18（1971.1），1-35＝富田仁編『比較文学研究・芥川龍之介』（東京：朝日出版社，1978）
- Lemoine, Bernadette. 1988. *Exotisme spirituel et esthétique dans la vie et l'œuvre de Lafcadio Hearn (1850-1904)* (= Études de littérature étrangère et comparée 81). [Paris]: Didier Érudition.
- 2004. "Lafcadio Hearn as an Ambassador of French Literature in the United States and in Japan" a paper presented at the Matsue International Symposium Commemorating the Centennial of the Death of Koizumi Yakumo. Oct. 1, 2004.
- 松村恒 2002 「ハーンにおける外国文学受容の形態——ゴーティエの翻訳の場合——」『Circles』5, 10-21.
- Robert, Marcel. 1950. *Lafcadio Hearn, tome I Europe-Amérique* (= Publications de la Maison Franco-Japonaise série B, tome III). Tokyo: Hokuseido Press.
- Tinker, Edward Larocque. 1925. *Lafcadio Hearn's American Days*. London: John Lane the Bodley Head.
- Yu, Beongcheon. 1964. *An Ape of Gods: The Art and Thought of Lafcadio Hearn*. Detroit: Wayne State University Press.

## P.S.

ここで事典の項目記事について注意を促しておきたい。それは

「クラリモンド」 菊地弘等編『芥川龍之介事典』（東京：明治書院, 1985）, 167a-168a  
というものであるが、安易に参照・利用することができないものである。簡単に問題点を指摘しておく、まずは、肝心要の見出し語であるクラリモンドの綴りを Clarimond としていること。カタカナでクラリモンドと書いているのに -nd のままで平然としているのは、項目記事の執筆者は語末の子音は読まないというフランス語の規則を全然知らないということである。二回でてくる綴りが共にそうになっているという指摘をして、ミスプリだというお決まりの逃げ口上を封じておこう。他にも外国語がでてくると、正しく綴れないというだけでなく、根本的にお手上げ模様だ。Lafcadio Hern とか dited by とか The World's Stories Tellers とか Cleopatra's とかとか、校正の誤りといった段階を超えている。それよりももっと深刻なのは、「原題は La Morte Amoureuse」としたことである。1836年の初出掲載は Les amours d'une morte という題で予告されていた。「一八五〇年三月二〇日『絵画雑誌』」とあるのは、la Revue pittoresque du 20 janvier 1850 の月名が読めなかった結果である。ハーンの英訳本については、「倉智恒夫の調査によると・・・「クラリモンド」を含んでいるものは次の二種」とするが、これでは倉智氏が気の毒である。倉智論文には三種が挙げられているのだから。しかもこの事典の挙げる二つ目のものは出版年が1807年とハーンが生まれる前の年になっていて出鱈目の限りである。実際には更に多く四種以上あるのだが、リプリントをも含めると書誌事項は錯綜するので、あらためて別所にて列挙しよう。

あとは長々とあらすじが要領を得ない形で続くだけで、芥川が何故この作品を選んだのかとか、この原典を訳したことから知られる芥川の文学嗜好とか文体の確立とかの意義には全然まるで触れるところがない。ハーンの英訳を通した重訳であることから起こることがらには触れ得ることは望むべくもない。従って英訳を介在したための固有名詞の変容（ロミューアルなど）にも全く気付いていない。

事典の短い項目記事にこれだけ見事に沢山の誤りを盛り込んだものは他に『小泉八雲事典』中の「仏教」の項目記事しか知らないが（cf.『プリンス通信』326-327（July-Aug. 2001）, § 627）、いずれもレファレンス・ツールに対して全幅の信頼を置きがちな我々への警鐘でもあった。

## 註

- (1) Lemoine 2004 は明言は避けながらも、後者に傾いている様な口振りである。
- (2) パーキンズの書誌に基づいて翻訳された文人のリストを作ると、フランスの作家が圧倒的に多いにせよ、それだけに限定されるのではないことがわかる（松村2002：11）。たとえばドストエフスキーなどがフランス外の文人であるが、ロシア語から訳したとは考え難いのでフランス語からの重訳ではな

いかと想像されるが、介在したフランス語訳を特定するまでは確実なことは言えない。

- (3) 従って Yu 1964: 3 の様にハーンの芸術活動即ち翻訳活動の開始を『クレオパトラの一夜』の出版年である 1882 年とする案には賛成し難い。
- (4) Robert 1950: 108-110.
- (5) 講義録にて言及されるゴージェにも注目を払わなくてはならない。E.g. "The Supernatural in Fiction," *Interpretation of Literature II* (Port Washington: Kennikat, 1965), 99.
- (6) 一般的にはハーンの翻訳は上々のものであったとの世評を得ている。E.g. "While Hearn was faithful to his original, he also improved upon it and many a scholar who knows both French and English has confessed under the rose that Gautier is outdone." (*Dayton Journal* (Sep. 30, 1904), quoted in Gould 1908: 204)
- (7) こちらの書簡は出版されている。"A letter to Jerome A. Hart, dt. May 1882," Bisland 1906: 244.
- (8) 大正 4 年 (1915) 7 月 21 年付井川恭宛書簡にて頼まれた翻訳に忙殺されていることをぼやいている (『全集』17 (1977), 287)。倉智 1971: 33 n.12 はこの翻訳とは「クラリモンド」のことを指しているとするが、「クラリモンド」は既にその一年前に出版されているので、それはあり得ない。倉智は「クラリモンド」の出版年を大正 4 年と誤っている (9)。
- (9) 芥川の文筆活動の開始は翻訳からであり、アナトール・フランスの「バルタザアル」がその最初を告げるものであった。これには個人的な文章修行ということばかりでなく、日本語自体の口語散文が形成途上にあった時代にあって、多くの若者が森鴎外『諸国物語』を範として、翻訳を通じて道を模索していた時代背景がある (井上 1992: 39)。
- (10) 例えば、『小泉八雲代表作集 耳なし芳一』 (= 日本童話小説文庫 11) 山宮允訳 (東京: 小峰書店, 1950) がある。
- (11) 原稿は四種存在するが、いずれも影印版で見ることができる。『芥川龍之介資料集』1 (甲府: 山梨県立文学館, 1993), 586-595. このうちの二種は『芥川龍之介全集』22 (東京: 岩波, 1997), 356-367 cum 609-619.
- (12) 芥川自身の証言がある。「それからゴージェは面白がつて読んだ。何しろ絢爛無双だから、長篇でも短篇でも愉快だつた」(「仏蘭西文学と僕」大正 10 年 = 『全集』7 (1996), 244)